

### 【3】 研究の取り組み

小学部の研究の構想に基づいて、コミュニケーションに視点をあてた研究に取り組んできた。以下、1年次と2年次の取り組みについて述べていきたい。

#### 【1】 昨年度（1年次）の取り組み

昨年度は、初年度として、大づかみに研究の構想をたて、それに基づいて実態把握を行った。加えて、子どもたち一人ひとりに対してコミュニケーションの目標を設定していった。

##### (1) 研究の構想

昨年度は、【1】で述べた研究の基本的な考え方の大筋を作った。その中で特に、

ア. 一昨年度までのからだづくりの取り組みを基盤としていくこと

イ. 「子どもの自主性を尊重し、反応的にかかわることを基本として、子どもたちのコミュニケーションの学習を援助していく」インリアルの基本理念を取り入れていくこと

ウ. 実態が多様な小学部の集団に対して、個別に目標を設定し指導をしていくことを確認した。

##### (2) 実態把握

小学部全体のコミュニケーションの課題や個別の課題を見つけ、指導法を模索するために、実態把握を行った。小学部の子どもの全体的な実態として、遠城寺式・津守式の発達検査（H4.5）によると、以下のことが分かった。まず全体の発達を見ると、

○全体的に見て、2～7才の発達を示している。

この発達の段階では、自我の充実  
自制心のめばえを大切にしていかなければならない時期である。

○三つのタイプに分かれる。

- ・特に発語や言語理解等、言語に関する力が落ち込んでいるグループ
- ・平均的に発達しているグループ
- ・言語に関する力が高いグループ

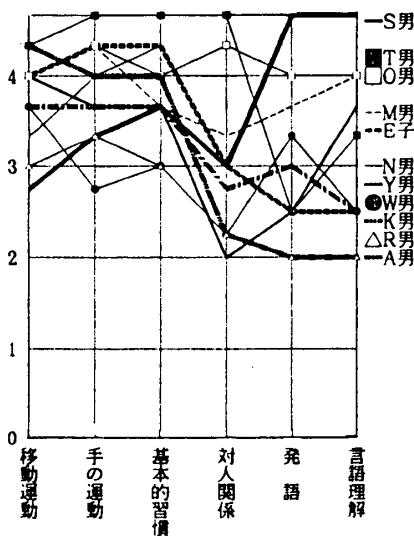
○個人差や個人内差が大きい集団である。

コミュニケーションの実態を教師の観察から見ると、

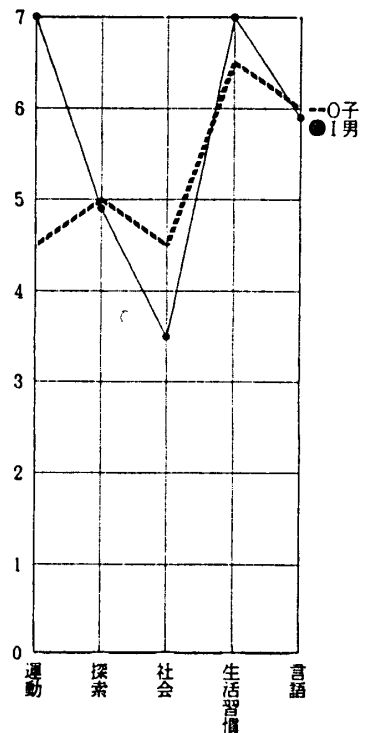
○表現する内容、技能、意欲との関係は、

- ・表現する内容、技能については、個による差が大きい。
- ・コミュニケーションの意欲から見ても、個による差が大きい、ある種の傾向は見られる。その傾向をタイプ別に分けてみると、

- ①意欲がある集団 ②親・担任等特定の人となら意欲的になれる集団



遠城寺式発達検査



津守式発達検査

③自分なりの方法（幼いやり方）で意欲的に行う集団

④相手から働きかけられるとできる子が自分からは働きかけない集団

がある。

○コミュニケーションの機能からみると、個による差が大きい集団である。

・その傾向で見ると、自閉的傾向の子どもは極端に持っている機能が少なく、ダウン症の子どもは発達は幼いが多いの機能がある。

・全体的に見ると、想像的機能・探究的機能・情動的機能が不足している。この機能の向上をねらいたいと考える集団である。

○語彙数

・集団の中の個人差は大きいですが、全体的に見ると語彙数は少ない。分類してみると、

①限られた場面で限られた言葉を使う。

②生活の裏打ちがあまりない言葉を使う。

③語彙は持っているが、生活の中では出しにくい。

④表出言語がほとんどない。

### (3) コミュニケーションの評価と目標設定及び指導の重点

研究を実践していくにあたって、個人差が大きい小学部の子どもたちに対して、1つの目標をめざしていくことには無理がある。そのために、個別の目標や重点を設定した。以下、その個別の目標と実態把握の一覧表を掲載しておく。

めざすコミュニケーション像

平成5年2月14日現在

名前 年齢	全体発達 と言語の 発達との 関係	発語 理解	伝達の機能						めざす像	つきたい力												
			現在持っている伝達の機能○ 持たせたい機能●							共通 関係	対人 関係	聞く			話す	書く						
			相互 関係 的機能	個人 的機能	道具 的機能	規制 的機能	創造 的機能	探究 的機能				情報 的機能	視線 注視	指示 聞き 動作				指示 を行 う場 場に応 じた	話を聞 き理解 する	話を聞 き応答 する	発声・ 発音	文字
K男 11歳	言語が 落ち込む	2: 0 2: 0			●														意欲 技能	語彙数 象徴的 能力 言い 方の パター ン		
E子 7歳	言語が 落ち込む	2: 6 2: 6	○	○	○	○	●	○	○											内容 技能	二語文 語彙数	
A男 10歳	言語が 落ち込む	3: 0 2: 6	○	○	○	○	●	●	●											内容 ※語彙数		
W男 9歳	平均的	3: 4 2: 6	●	○	●	●														技能 意欲	応答	
N男 9歳	言語が 落ち込む	2: 6 2: 6	○	○	○	○	○	●	●											技能	二語文	
R男 12歳	言語が 落ち込む	2: 6 2: 6	○	○	○	○	●	●	●											技能	二語文	
T男 10歳	言語が 落ち込む	2: 6 3: 4	○	○	○	○	○	○	○											技能	発音・ 発声	

Y男 7歳	言語が 落ち込む	2: 6 3: 9	●	●	●					自分の思いを言葉で 伝えようとする子	●								意欲 語彙数 技能 言い方のパターン
M男 9歳	平均的	4: 0 4: 0	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	内容 技能 語法の誤学習
O男 9歳	平均的	4: 0 4: 0	○	○	○	○	○	○	○	自分の思いを相手に わかるような文脈で伝える子	●	●	●	●	●	●	●	●	技能 構文 文字
S男 8歳	言語の方 が高い	4: 8 4: 8	○	○	○	○	○	○	○	全ての機能で偏り大 行動を言葉に表したり言葉を 行動化したたりする子	●	●	●	●	●	●	●	●	内容 技能 応答
H子 11歳	平均的	6: 0	○	○	○	●	○	●	○	場に応じた会話ができる子 強いて言えば	●	●	●	●	●	●	●	●	内容 敬語
I男 12歳	平均的	6: 0	○	○	○	○	○	○	○	人との関わりの中で、好まし い応答や適応ができる子	●	●	●	●	●	●	●	●	内容 技能 理由や条件付きの構文

発語・言語理解は遠城寺式、言語は津守式検査の項目による（平成4年5月現在）  
表の名前の順序は言語理解の発達順に並べた。

- …もう既にクリアした課題
- …まだクリアしていないが今は考えていない課題  
でき方の弱さはあるが、ほぼできる課題
- …当面する課題
- 空白 …まだ考えていない課題

#### (4) 今後の課題の設定

昨年の実践の結果、以下のような課題を見出した。

- ① 実態把握をさらに詳しいものに
- ② より実態に即したコミュニケーションの評価と目標設定及び指導の重点
- ③ コミュニケーションに関する指導法の検討
- ④ インリアル的アプローチを大切に授業づくり

これらをもとに、本年度の実践を行うこととした。

#### [2] 本年度（2年次）の取り組み

##### (1) コミュニケーションの評価と目標設定及び指導の重点のさらなる検討

4月より担任が変わり、新たに目標と重点を設定し、実践することになった。その際、自我の確立や自制心の芽生えをめざした自己内対話にも、さらに目を向けていこうとした。その実践の様子については、後の個人事例の項で述べたい。

##### (2) 授業づくりの実践

本年度は、特に授業づくりの実践について取り組んできた。小学部の子どもたちのコミュニケーションの力を育てるために、まず分かってあげることが大切であることは仮説にも述べている。このことは、授業の中でも大切にしていきたい。子どもたちが楽しめる時間を作っていく、さらには、多様な経

験を積み上げていく。その経験を通して、指導者と或いは子ども同士で共感していく。また、授業の中に、意図して自然なコミュニケーションの場面を作っていく。我々は、このような、授業づくりに取り組んでいきたいと考えた。

そして、授業を作っていくときの留意点として以下のようなことを考えた。

### 授業づくりにあたっての留意点

#### ① 設定場面や追い込み場面を作りながらの教師の待ちの姿を大切にしていく

児童は、自信がなかったり必要に迫られていないことは、自ら進んで活動することが難しい。そこで指導者は、設定場面や追い込み場面を作ることによって、活動を促していく。その際行動を、直接促してさせるのではなく、できるだけ、子どもの自発的な活動を待つ。この自発的な活動を行う際に、時として、子どもたちの中に葛藤をよび起こす。この葛藤は、自己内対話をよび起こしていると考えられる。

#### ② 遊びを授業の手段とする

楽しい遊びは、子どもたちの自発的な活動を生み出し、自我の確立に大切な「みため・つもり活動」を行いながら、自己内対話を行うことができる。また、その楽しさを、まわりの指導者や子どもたちと共感することによって、有効なコミュニケーションを行っていくことができると考えられる。そこで、授業の中にも、楽しめる遊びを積極的に取り入れていく。

#### ③ いつでもどこでも、繰り返し、個人目標に照らした取り組みを行っていく

コミュニケーションの評価と目標設定及び指導の重点を常に念頭におきながら、いつでもどこでも指導していく。

授業づくりの実際については、次の教科領域の実践事例の項で述べていきたい。授業づくりの観点は、生活単元学習、日常生活の指導、遊びの時間等で軽重はあるが、以下のようなものである。

#### ① 単元や題材の設定及びその配置

どのような題材が、コミュニケーションの指導に有効であるか。またその題材をどう単元に有機的に配置して行くか。また、それに伴ってどういう指導を取り入れながら、子どもたちに与えていくか。

#### ② 指導者の関わり方

子どもたちが意欲を持って共感しながらコミュニケーションするために、また、子どもたちの伝えたいことがよりよく伝えることができるように、指導者や補助的指導者は、どのような援助をしていくのがよりよいか。

#### ③ 個を生かす指導の工夫

小学部の場合、個を生かす指導は、コミュニケーションの評価と目標設定及び指導の重点をどう工夫しながら、授業の中に、組み込んでいくかということである。そのために指導形態（個別指導の場面、グループ指導の場面、一斉指導の場面）を取り入れたり、授業の中に個に的をしぼった発問や個別の活動（同一教材複数課題、複数教材同一課題、複数教材複数課題）を用意していくか。